

パウロのギリシア伝道の内容

—何故ギリシア人はパウロの伝道を受け入れたのか—

社会・哲学 小澤克彦

はじめに、問題の所在

イエスが十字架刑にかかって後、そのイエスが復活したということで再結集した弟子たちが、あの我々の師であったイエスこそ救世主メシア（キリスト）であったのだということで共同体を形成してイエスの教えを広めていったことは周知のことである。

他方、イエスはユダヤ人として、神およびそれと関わる人間理解についてユダヤ教の神官・学者の理解は間違っているとしてその「刷新運動」を始めた人であった。だから語りかけた相手は当然「ユダヤ人」であり、イエスの視野にギリシア人だのローマ人など入っている筈もなかった①。従って、同じユダヤ人であったその弟子たちも当然ユダヤ人とその社会を相手にしていた。つまり、イエスおよびその弟子たちの宗教運動というのは「新しい宗教の提唱」でもなければ「異教徒への布教」などを初めから志していたものでもなく端的に「ユダヤ教の刷新運動」に尽きていた筈のものであった。しかしそれが一変してしまうのが「パウロ」という男の出現からであった。パウロは知られているようにもともとユダヤ教世界の人間であり、しかも有力者の家系にあったからイエスおよびその弟子たちの迫害者であったのだが、『使徒言行録、九』以下によると天からのイエスの声をきいて「回心した」という事件の当事者で、やがて「異教徒伝道」に従事することになったとされる②。

あらかじめ言っておくと、この異教徒への伝導においてイエスの教えは「ユダヤ教の刷新運動」ではなくなって「新しい宗教」に変質したのである。それ故に、臚にはあっても何か異質なものを感じたに違いないユダヤ人信徒たちの初期共同体において「異教徒伝道」は猛烈な反対・異論を出され、共同体挙げての大討論のテーマにされていったのである③。

しかし結局パウロの働きが信徒の拡大という共同体にとっては死活問題への貢献になるということで認められることになったと考えられる。そしてこの段階で「キリスト教」という「新しい宗教運動」へと変質したのであった。これは『使徒言行録、十一の26』以下がはっきり示しているが、そこではステパノの事件で各地に散っていった人々の中でアンティオケアに逃れた者たちがギリシア人にキリスト・イエスを宣べ伝え、ギリシア人の中でキリストに帰依するものが多くなったという話を聞いてイエルサレムの使徒たちはバルナバをアンティオケアに遣わした。そこで彼はパウロを捜し出して一緒に人々に教え、かくしてアンティオケアで始めて弟子たちが「クリスティアン」と呼ばれるようになった、と語っている。ここで教えた相手がギリシア人であることは文脈から明らかである。

それゆえ、クリスティアンという名称は「ギリシア人信徒」において始めて使用されたのであって、この事実は大事なことである。というのもここで始めてイエスの教えはユダヤ教から見ての「分派活動」、イエスの意図では正しい神の理解に立ち返る「刷新運動」ではなくなって、ユダヤ教などとは全く無関係でユダヤ教の教えなどユの字も知らないギリシア人の「クリスティアン（つまりキリストとされたイエスの教えを信奉する人たち）」と呼ばれる人たちによる「新しい宗教」になっているからである。つまり「キリスト教徒」という名称は、ギリシア伝統の「オリュンポス神信仰」を捨てて新たにもたらされた「キリスト」なるものを受け入れた「転向ギリシア人」に対する名称であったのである④。だからキリスト教というものがはじめからギリシア的なもの当たり前と言えども当たり前だったと言えよう。

ここで問題になるのが、なぜギリシア人はこのユダヤという辺鄙な田舎の宗教のそのまた「分派の教え」などを受け入れたのか、ということである。当時ギリシアというのは文化の代名詞でありローマ帝国を文化的に支配しているものであった。それに対してユダヤ教などというのはローマ帝国から見れば帝国の片田舎であるパレスチナ地方の一部族の民間信仰くらいのものであった。文化に優れたギリシア人がこのユダヤ教など気にも止めず「田舎の宗教」として切り捨てても全然不思議ではなかったのである。

それなのにギリシア人は「古代ギリシア伝統の宗教」を捨ててまでパウロによって伝えられた「新奇」な筈のユダヤ教の分派活動に帰依してしまったのであった⑤。そしてこれはアンティオケアだけのことでなくやがてパウロによって全ギリシア世界にもたらされていき、ギリシアを故郷として根付いて拡大し、やがてギリシア文化を持っていたローマ帝国の国教にまでなってしまったのである。もちろん後世になってキリスト教がローマの国教にまでなるにはパウロ以降にさまざまな文書が書かれ、学者も輩出してキリスト教思想の整理がなされ、また強固な共同体組織もできあがっていった、そしてギリシア・ローマ世界での信者の数が社会的に大勢力になっていったからであるが、その発端がパウロにあるわけである。

他方、今日からみればパウロの思想はパウロ以降に書かれた『福音書』はじめ他のキリスト教文書との異なりがあり、そのため『福音書』などを大事とする研究者たち（たいていのキリスト者はそうなる）は「パウロの異質性」をあげつらったり、思想の狭さ、独自すぎる解釈などを批判したりすることが時折あるのだが、しかしこれは（「勝手に」というより後世の教会権威にしたがって）「後世の思想」を正しいとして基盤であった「原初の思想」を批判しているにすぎない。「信仰」の立場にあるキリスト者なら教会権威に縛られるからそうなるも仕方ないが、しかし研究者としては致命的な誤りとなる。つまり初期のあり方を後世のあり方から「批判」などしても仕方ないのであって、「初期はこういう伝道内容」だったのだが後代にその思想が整理された時にはこういう異同が見られるようになったという、「教会による正統思想の形成」という視点で見て行かなくてはならないのである。

実際、どう批判してみても伝道初期の50年くらいの時期のギリシア人が受け入れたイエスに関わる思想というのは「パウロによる教え」以外には何もないのである。つまりパウロが伝道に歩いていた初期の時代には当然今日のキリスト教の『聖書』に当たるものなど何もなく、もちろん『福音書』なるものも他の文書も全くなく、しかも一般ギリシア人はユダヤ教など全然知らなかったのだから「ユダヤ教の聖典」の知識もなく、伝道されているギリシア人にとっては「パウロの言葉」以外には全く何もなかったのである。

だから我々はパウロ時代の初期のキリスト教の思想的側面を、後代になって書かれた『福音書』やその他の文書などによって探ってもとんだ見当違いになるのであり、それとは全く離れて、ただ一途に「パウロの伝道のあり方」とその『書簡』によってのみ西欧に根付いた「キリスト教の発生」を探るのが正当なやり方となるのである。

資料の問題

ここに我々は二つの資料を持つ。一つは文字通りパウロの『書簡』であり、もう一つはパウロの伝道のあり方を伝える『使徒言行録』とである。『書簡』は通常四大書簡と呼ばれているものが大事とされるが、初期伝道ということならキリスト教文書としてもっとも始めのものと推定されている（当然諸説があるが）、一般には50年頃とされているパウロの『第一テッサロニケ書簡』がやはり重要となろう。

後者の『使徒言行録』は『ルカ福音書』の著者による「続編」という性格を持ち、執筆年代の詳細は分かっていないが少なくとも70年のユダヤ戦争以降でたぶん一世紀末とされている。従っておそら

くは第一テッサロニケ書簡より3～40年前後の後の執筆となり、仮にもし、いわゆる「我々は」という言い方に変わる十六の10以下の記述をもとに著者であるルカがパウロのギリシア伝道に同伴していたと仮定しても執筆は相当後代のものとなり、そうだとすると記憶違いもさることながら相当に脚色されている可能性がある。同伴していなかったとしたら、誰か（パウロ自身である可能性もあり得る）からの報告をさらに自分流に書いたということで相当に離れている可能性がある。いろいろ議論できるけれど、パウロはその書簡でテモテなど他の伝道旅行の同伴者についてはしっかり明記しているのに伝道旅行へのルカの同伴をにおわす何も何処にも書いてはいないので常識的にはルカが同伴していたとは信じられない⑥。となると記事の信憑性についても多くの疑問が出てくる。そして実際パウロの自筆の第一テッサロニケの記事との矛盾も一読して明らかなので、そうなる証言としての信憑性はだいぶ差し引かれてくるであろう。ただし、そうではあるけれども、一世紀末のルカの時代にパウロの伝道がどのように評価されていたのかについては第一の資料となる。

こういうことになると、我々としてはやはり「パウロの書簡」によってのみその伝道のあり方をたどるのが正当であると思われる。そして視点は「何を語ったのか」である。それから今度はギリシア人がなぜそんな話をまともに聞き入れたのか、と問題にしてみたい。後者は当然ギリシア人の伝統的宗教との関わりが問題となる。

パウロの伝道

パウロがその伝道で何をギリシア人に語っていたのかについては自筆の書簡があるわけだからこれが第一資料になるのは当然であり、その最初はテッサロニケの共同体に当てた『第一テッサロニケ書簡』ということになる。これはパウロがギリシア本土への伝道を志して北部の町フィリッピについて精力的に伝道活動を行い、そのため現地のユダヤ人に迫害を受けたと『使徒言行録』に伝えられる場所であり、文字通りごく始めの伝道地の一つであった。ここでパウロはかなりしっかりした共同体を作るのに成功したようで⑦、そしてこの地を後にしてアテネに赴きさらにコリントスに行って伝道活動していた。多分アテネにいた頃テッサロニケの信者から手紙があり、そこで起きている問題に 대응するように自分が行ける状況にないということでテモテを遣わし⑧、彼が戻ってきての報告をきいた上での書簡である。現存するあらゆるキリスト教文書のもっとも初めのものとなるというのが通説で、従ってこの文書の持つ意味は大きい。

さて、パウロがテッサロニケのギリシア人信徒に語った「信仰」の内容に関わる言葉であるが、ここで研究者には常識的に知られてはいるのだが、しかしキリスト教信者としてなかなか受け入れがたい事実について重ねて注意しておかなくてはならない。それは先にも指摘したことであるが、当時にはキリスト教の「正典」、つまり「伝道のための権威」とされるような文書など何もなかったという事実である。『聖書』なるものが形成されるのは100数十年後のことであり、さらにそれを統一的に解釈する全国的教会組織ができるのはそれからまた300年後のことであった。これでは初期キリスト教なるものは共同体ごとに全くバラバラであっておかしくない。そうしたくないキリスト教研究者はやむなく『旧約聖書』はあったのだと主張したくなるのだけれど、しかしこれは「ユダヤ教の正典」なのであり、しかもイエスによって「乗り越えられた」筈のものだから本来これを「権威」として教えるわけには行かない筈のものである。だから多分昇天前のイエスの使徒であったものたちは「イエスの言葉」を思い出しては説教していたのかもしれない。これがいわゆるQ資料とよばれる「イエスの言葉集」を想定させているわけである。

ところがパウロはイエスが在世中の弟子ではないからイエスの言葉など一つも聞いてはいない。使徒たちから教えられた可能性は大いにあるけれど、それを「権威」として伝道したという形跡はない。つまり彼は「権威とする言葉」は何も持ち合わせていなかったのである。

それにも関わらずどうして彼はイエスを伝道できたのかというと、パウロはイエスを「救世主キリ

スト」と心から信じ、それによる「救済」への全身全霊をかけた信仰があったからである。これを持つカリスマ的宗教人間はこれだけでたくさんの人間を魅了してしまい信者を多く獲得できる。一般信徒はこのレベルで信仰へと導かれるのは今日でも変わらない。だからここに取り立てた「神学」などはいらないのだが、しかしこれだけでは共同体としては「身内」だけのものになってしまい流布・拡大してはいかない。そのためには多くの共同体を統一する「神学」が必要になってくるしそのための指導者も育成されなければならない。その後者の面もパウロは持ち合わせていた。その神学が彼の書簡に見られるもので、こうして彼は共同体を組織立てていたと思われる。

こうしてパウロはその書簡に「神学」や「教会論」を展開しているのだが、ところが、この時の神学の論理にパウロは「ユダヤ教の聖典」ないしパリサイ派の立場の解釈を根拠にしている。パウロ書簡での彼のやり方がそうだということは研究者なら誰でも知っている。だがこのことは「乗り越えられ、捨て去るべき」聖典を「乗り越えた思想」の根拠にするなどというとんでもない矛盾を含んでいたのであった。なぜそんなことになってしまったのかというと、今も指摘したようにパウロは「イエスの言葉」を知らず他に「正典」とすべき文書もなかったからである。他方、パウロにしてみればイエスの運動は「ユダヤ教の刷新運動」だったのだから「ユダヤ教」を基盤とした運動であったし、だから「ユダヤ教の聖典」は基盤的に使えると考えたのであろう。それにパウロは有力なユダヤ人の家庭に育ちユダヤ教に浸かった教育を受け、何を考えるにしてもユダヤ教を基に考えるようになっていたであろう。これは今日の欧米の学者が何といっても無意識的にもキリスト教を基盤にせずには物事を考えられないのに似ている。

こうしてパウロは自説の根拠にユダヤ教の聖典を用い、しかもこれはパウロだけではなく『マタイ福音書』などもそうであったから、これが結局後にキリスト教の『聖書』を形成しようとした時ユダヤ教の聖典を『旧約聖書』などという名称で入れ込んだ原因になっていると考えられる。ただ『旧約聖書』^⑨というこの名称はずいぶんと苦し紛れで、本来「旧の契約」などは「新しい契約」がなされた時には「無効」になるのは常識で、従って本来「キリスト教聖典」の中などには入れられない筈のものである。だから初期キリスト教思想家であるマルキオンなどは徹底してこのユダヤ教の聖典をキリスト教から排除しようとしたのであった。しかし後の正統教会はこのユダヤ教聖典もキリスト教の聖典と認めてしまい、かくして「古い」契約も大手をふって『聖書』の一部となって、今日では時に『新約聖書』まで凌駕してしまっていて一人歩きしている風情まで見られているのであった。ただこの問題は教会史の問題なので別としてパウロに戻ろう。

パウロの教え

さて、パウロはその伝道で何をギリシア人に伝えたのかというと、「テーマ」ははっきりしている。それはパウロ書簡に共通しているからである。ここでパウロ書簡というのはパウロの直筆になるとされる七つの書簡「第一テッサロニケ」「ガラテヤ」「フィリピ」「フィレモン」「第一、第二コリント」「ローマ」とであるが、これにパウロに近い弟子によるものと推定されている「第二テッサロニケ」「コロサイ」「エフェソ」を加えても良い。

いずれにせよそこでの共通しているテーマとはいうまでもなく「主による救済」でありそれ以外ではない。ただ、「キリストの神に従う者は救われる」という一点はどの書簡でも変わらないけれど、その細部においては各書簡での矛盾や強調点の違いなどもあって複雑であり、それはそれとしてしっかりした分析がなされていかなければならない。それは次の課題として、ここではとりあえずパウロによるもっともはじめの主張になるはずの『第一テッサロニケ書簡』での場合に限定してみよう。

そこでは先ず挨拶に相当する1章の9～10節において、神が死人の中から復活させたその息子、つまり来るべき怒りから我々を救うイエスが天からくるのを待ち望む、という表現が見られるがこれは要するにこの共同体の目的意識をはっきりさせているものとなる。

つまりこのパウロが形成した共同体は「何を目的として」参集してきた人々のものなのかという「来るべき怒り」からの「救済」を求めて、それを「死者から復活した」イエスに託するというわけであった。この三つが要点でこれはその後の書簡でもベースとなってくる。

『第一テッサロニケ書簡』ではそれは第4章の13節から5章10節までに語られてくる。そこでは「死者の復活」から語ってくるが、これは「今まさに来たらんとしている終末」という観念に関係していることは明らかで、つまりパウロは伝道において「今まさに来たらんとしている終末」を語り、その「終末の時にける救済」を述べていたと思われ、それに惹かれて多くのギリシア人がパウロに従うようになったと思われる。

ここにおいて、ではキリスト者になったものの「終末まで持ちこたえられずに」死んでしまった者はどうなるのか、という疑問が出されていたのであろう。それに答えるのがこの部分なのであり、パウロはここで「イエスの復活」を指摘して、神はイエスを復活させたのだから、イエスに従っていた者は死んでいようと生きていようとに関わりなく一緒に復活させる筈である、と述べてくる。そして、主（イエス）自身が「命令において、天使長の声において、神のラッパの響きにおいて」天から下ってきて、そしてキリストにある死者たちが始めに復活し、その後残って生きている我々も彼らと一緒に同時に、「主と会うために雲に乗って空中に連れ去るであろう、このようにして我々はいつも主と共にあることになる」と言っている。

この文において「主と会うために雲に乗って空中に連れ去られる」というところがおそらくギリシア人にとってのパウロの受容の要点になっていたと思われる。なぜなら、これだけはユダヤ教のユの字もしらず、オリュポスの神々の伝統の中にいたギリシア人にも「分かる話」だからである。ギリシア神話において、神が人間世界から人間を天に引き上げる話など枚挙のいとまもないくらいあって、たとえば「星の物語」など典型的な話で「大熊座の妖精カリスト」「オリオン座」「双子座」「ヘラクレス座」「ペルセウス座」「射手座のケイロン」「蛇遣い座のアスクレピオス」などたくさんいる。だからこれはギリシア人にもイメージ的に分かり易く、キリストの神の信仰は「自分も天に昇れる」というように受け取られたのであろう。

さらに「命令において」以下の言葉は、「神のイエスに対する命令」なのか「イエスの死者に対する命令」なのかははっきりしないけれど、それはそれとしてこの語りのイメージであるが、これはパウロが伝道において誰もが容易にイメージできる描写的な語り方をしていたであろうことを伺わせる。

実際、相手はユダヤ教の事など全然知らない「一般の市民」むしろ社会的な地位などない「女性、下層民」であったことは確かであったろうから、こうした分かり易いイメージ的語り方でなければ受け入れてはもらえなかったろう。「書簡」というのは共同体の指導者に宛てられていると考えられるので「観念的・神学的」な語り方も多いけれど、これがそのままパウロの伝道での語り口であったとは信じられない。こうしてパウロはイメージとして「復活」を人々に印象づけていたと思われる。

さて、とにかくここで我々が注意しておくべきことは「終末は今まさに来たらんとしている」という意識においてパウロは伝道していたという事実である。後にその「終末意識」は引き延ばされてしまうが、この意識は切迫した感覚を持って人々に迫ったものと思われる。

他方、その「復活」であるが、これはイエスの「三日目の生き返り」に基づいて何となく「単に生き返る」というイメージで考えてしまう人がいるが、それはそうではなく「神のもとへの復活」であったことも今の語り口から確認されておかなければならない。そしてギリシア人自体がその伝統的宗教においてすでにこうした発想法を持っていたことはこれから指摘する。

『テッサロニケ書簡』に帰ると、ともかくパウロはその「終末の時」に関して、それは「不意に突然やってくる」ということを「盗人」や「陣痛」にたとえて指摘し、それへの「備え」を助言して終わりの言葉につなげていっている。ところでこの「終末」であるが、ギリシア人が（イエスの時代のユダヤ人も）今日の我々の「観念」としての「神の国の実現」に先立つ「地上世界の終末」と捕らえ

ていたとは信じられない。それは後代の「神学」の言うところであり、ギリシア人は多分「現実的な国の滅び」として捕らえていたと思う。それは当時のギリシア人の時代背景をみれば容易に推測される。つまり当時のギリシアはローマ帝国に完璧に滅ぼされて支配下に置かれてしまっていた。かつてのアテネやスパルタ、テバイなど栄光のギリシア都市は失われ、ギリシア人は帝国中をさまよっているようなものであった。だからギリシア人は現実的に自分たちが滅ぼされるということを肌身で知っていたであろう。そうした緊迫した心情が「救済の宗教」を求めていたのだと考えられる。

以上のことから我々が注意しておくことは、パウロの教えが「天への復活、つまり救済」というものにあつたが故に異教徒であったギリシア人に受け入れられたということである。これを確認するためには当時のギリシア人の「復活」の考え方を見ておかななくてはならない。しかしこれが少々厄介で、ギリシアの伝統的な宗教は「祭儀宗教」であり日常の様々な事柄に「力」を与えてもらうための祈り・祭りが主体であった。そして「個人の心」に関わることは「密儀宗教」の取り扱うところだったのであるが、しかしこれは「密儀」であるためにその実態が知られないようにされていたのである。従って我々はその「要点」だけしか指摘できないのであるが、とりあえずここでの我々の課題にとってはそれで十分である。

古代ギリシアでの「復活」観

ところで、古代ギリシアに限らず、一体に神話は「死後の運命」そのものについてはあまり多くを語ってはこない。例外は「王の永遠の生」を問題にしたエジプトの王家の神話くらいのものである。なぜ積極的な「死後の運命」の話が無いのかというと、太古の人類にとっての最大の問題は、自分たちの力の及ばない自然世界の中で翻弄されながら何とか「衣・食・住を確保して安定して生きる」ということだったからである。そのために人類は「自然」への働きかけという意味での「儀礼」を持ち「繁栄」を祈願した。だから宗教は「祭儀宗教」となったわけである。

神話はこのレベルを原点として「超越的な自然」を「人格化」して語るものであり、ついで集団のあり方、その集団の栄光を担った英雄の物語となっていく。いずれにしても「今を生きる」ということに関わって神話は形成されていた。だから神話というのはもともと「現在の世界」の有り様を語っていたのであり、「死後の世界」のことなどはあったとしても付随的にしか触れられないものであった。

つまり神話には、後代のキリスト教などの「宗教」が問題にしているような「死後の幸い」などといったものは基本的になかった。したがってギリシア神話の場合でも「死後の幸い」ということはあまり考えられてはおらず、「死」が望まれた時それは「栄光の生」をもたらすものとして引き受けられたものだった。

それ故ホメロスの『オデュッセイア、十一歌』では「死霊の神託」という非常に興味深い場面があるのだけれど、そこでの死霊たちはまさしく亡霊のようであり、生き血をすすってようやく生者と声を交わすことができる影のような存在で、生前には誉れの中に生きていた英雄の代表である「アキレウス」ですら、死者の中であって「王」でいるよりも生者の中であって貧しい「農奴」でありたい、と嘆いている始末であった(487ff)。だから古代ギリシアを貫いて「死者の世界」である冥界は基本的に「暗く陰鬱な場所」と考えられていた。

しかし、古代ギリシアでは時代が降るにしたがってこうした「暗い死観」は乗り越えられていき、すでにホメロスにおいても「死者の赴く幸福者の島」という観念ができあがっていた。これは「エリュシオン」と言われ、あるいはヘシオドスでは「幸福者の島」とか呼ばれているもので、死者の赴く所とはいいながら「冥界とは別個の場所」に想定されていた。つまりホメロスに従うと大地の果てを巡っているオケアノスの岸辺である。神話の早い時期は、ここは「英雄」に用意されているようなところだけれど、時代が下がると「倫理的な意味での優れた人」に用意されている場所のようになってくる。

たとえばプラトンの描きなどが典型的なものとなる^⑩。こうした考え方を許す一般的な思考があって、それがさらに「秘儀を受けている人」というようになって、こうしてたとえば「エレウシスの秘儀」などが生まれていったと考えられる。

このレベルになると「死後についての観念」は神話の世界を越えて、一つの「宗教」になっているか、あるいは「思想」になっている。たとえば「オルフェウスの密儀」とか「ディオニュソスの秘儀」、
「エレウシスの秘儀」あるいは「ピュタゴラス教団」、そして「プラトン哲学」などがその代表的なものとなる。

ただこれらは、ピュタゴラスやプラトンを除いて、多くは「秘儀」として他人に口外したり文書に残したりできないものだったので当然その詳細はわからない。およそどんなものであったのかの推察くらいしか許されないのだけれど、その推察に基づくところを見てみよう。

「オルフェウス教団」

「オルフェウス」というのは「冥界に死んだ妻を求めて降りていき、その神秘的な音楽の技で冥界の王を魅了して妻を戻されたけれど、最期のところで、振り返ってはならないとの禁を犯したため妻を失った」と一般に紹介される神話上の音楽の英雄であるが、この「冥界下り」が主要な要素になっていたようである。ただしこれは一般伝承では「失敗」に終わっているのが問題だけれど、悲劇作家エウリピデスの『アルケステリス、357』などによる限りどうも初期の伝承では「成功」となっていたのではないと思われる。というのもそこでは、身代わりとなって死に赴く妻に向かってアドメトスが、「もし自分にオルフェウスの歌と音楽の腕があったとしたら冥界の女王とその夫を魅了しておまえを地下から連れて帰れるだろう、その折には渡し守のカロンも止めようとはせず無事におまえを光りの世界に移し得よう」と語っているからである。「失敗」の話は物語を面白くするため改変し、そちらの方が有名になってしまったのかもしれない。こういったタイプものは他に「テセウスのアリアドネの置き去り物語」などもあるので、この場合もそうともとれる。だとしたら「冥界下りにおいて妻を再生させた」となるので「秘儀」とも成り得る。ただプラトンでは「失敗」とされる説が『シシュンポシオン、179D』で紹介されているので神話の合理的解釈がはやった古典期あたりで改変されたのかもしれない。

「ディオニュソスの秘儀」

ディオニュソスの秘儀は通常「ザグレウスの神話」として知られているものが主体となると思われるが、これは「怪物の巨人に喰われてしまったけれど再生した神ディオニュソス」の物語なので「再生の秘儀」の主体となり得る。また他方でエウリピデスの悲劇『バツカイ』で有名な「女性たちが陶酔のうちに神ディオニュソスと合一する」という秘儀もあり、こちらはローマ時代にまで流行して禁止令がだされる程になっていて有名になっているけれど背景にザグレウスの神話があるようである。つまり「陶酔のうちに神と合一」することによって「新たな者として生まれ変わる」というタイプの秘儀であったと考えられる。

「エレウシスの秘儀」

「エレウシスの秘儀」は「穀物の神デメテルとその娘ペルセポネ」の神話が核となっているもので、「冥界にさらわれたペルセポネが再生する」物語によって「再生の秘儀」が形成されていた。ただしアリストパネスの『蛙』などによると「地上に再生」するのではなく「冥界において幸いなる者として再生する」といったものであることに注意しなければならない。

「ピュタゴラス教団」

「ピュタゴラス教団」というのは、人間の主体を魂に求め、それは天上より落ち肉体の中を彷徨い輪廻しているものとして魂の天への回帰を求める宗教教団であった。そしてそのための道として戒律を定めて心身ともに「清貧なる生活」を心掛ける一方、魂を浄化するものとしての「音楽」を重要視し（そのためこのピュタゴラス教団はオルペウス教団と近接したらしい）、さらにその音楽の秘密としての「数の比例」の研究において学問集団ともなっていたものである。

「プラトン哲学」

また、これらは「宗教」として存続していく一方で哲学の世界に引き込まれていく。というのも古代ギリシアで生まれた「哲学」というのはもともと「良く生きることについての知の愛し求め」というもので「人生の形成論」だったからである。

その中で「死後の世界」が大きな問題にされていたのがプラトンであった。その説は彼独自のものというより先行の神話や思想、とりわけピュタゴラスの教説を自分なりに展開したものと言える。ここではピュタゴラスと同様、人間を魂と肉体との結合体と捕らえ、魂の肉体からの解放を主張していた。その有り様を「肉体は魂の墓場」と捕らえ、『パイドン』で展開されているように「死」とはその「墓場からの解放、魂の再生」であるとして積極的な意味を見、その「生と死」をいかなるものとして理解すべきかが結局プラトンの問題となっていたのであった。

さらにこのプラトンを引き継いで、キリスト教が大きな勢力になってきた頃のローマ期も最後くらいになってプロティノスが現れ、「地上世界」から「イデア界」へ、そして一者なる「神」への帰還、合一の哲学を説いていたのであった。

以上のように見てくると、こんな思想を持っていたギリシア人がパウロによる「復活の思想」を示されてびっくり仰天することはなかったであろう。アテネの「アレスの丘」でパウロが笑われたという『使徒言行録、十七の32』での報告は、そこではっきり言われているように相手が「エピクロスの徒」であったからで、彼らは「唯物論者」だったからである。

しかし問題は、ではなぜこのギリシア人はそれらの伝統的な密儀宗教や哲学を捨てて「イエスによる復活」を説いたパウロにしたがったのか、ということになってくる。それはおそらく彼らがこれらのギリシア密儀や哲学から疎外されていたということと、やはりパウロの説いたところに大きな魅力があったからであろう。それがどのようなものであったのかはすべてのパウロ書簡の分析が必要となってくるであろう。それは次の問題として、この論考は先ずそのパウロのギリシア伝道の性格を見ることを目的としたので以上までとしたい。完。

注

①、もちろん『マタイによる福音書』の最後、二十八の19にある有名なイエスの弟子たちに対する命令「行ってあらゆる国の人々を弟子とせよ」という言葉や『ルカ福音書』の二の32の「異邦人を照らす光」などに端的に見られるように『福音書』で異教徒への宣教が宣言されていると見ることは可能である。しかし、この『福音書』自体がパウロの「異教徒伝道」が成功した後に書かれているのであって、異教徒伝道が公認されていた時代に書かれているからそうなたただけの話である。もともとのイエスの意図はユダヤ人としてユダヤ教内での神官・学者の神の解釈への批判と自分の理解する「正しい神の姿」を伝えることが目的であったのだから「ユダヤ人」に向けられていることは確実である。

②、彼がユダヤ人の有力者の家系であったことは彼が『使徒言行録』で再三言及されているように「生まれつきのローマ市民」であったことから確実である。また、彼のイエスの使徒への迫害と回心は『使徒言行録』だけの報告ではなく『ガラテア書簡、一の11』以下を典型にパウロ自身の書簡の中でも再三繰り返されていることは

周知のごとくである。ただし書簡では『使徒言行録』にあるダマスコスでの劇的な話は語っていない。

③、これについては、拙稿『パウロのギリシア伝道の認可問題』岐阜大学教育学部研究報告，人文科学，第51巻1号，2002年で見えておいた。

④、それ故なのであろう，彼らが「自分の国の人々（つまりギリシア人）」に迫害されていたらしいことが『第一テッサロニケ書簡，二の14』に見られる。

⑤、『第一テッサロニケ書，一の9』では「偶像から神に立ち返った」という表現で言われている。もちろん「偶像」とはギリシア人の「オリュンポス神信仰」を指している。

⑥、ルカについては『フィレモン書簡，24』『コロサイ書簡，四の14』『テモテ書簡，四の11』の三つの書簡の結びの挨拶のところで「同労者」として言及されているのみ。しかも今日真正の書簡とされているのは『フィレモン書簡』だけである。『コロサイ書簡』でよく知られた「医者であるルカ」の紹介があるわけだが，いずれにせよ伝道旅行への同伴は全く何も示唆さえもされていない。だからいわゆる「我々資料」はテモテなどの同伴者の日記などをそのまま用いた可能性もあり得るわけである。

⑦、従って、『使徒言行録』での筆致は「短期間」であったとしか読めないのだが，そんな短期間で共同体が形成されるわけもないから，かなりの期間滞在していたと見るのが普通であろう。

⑧、『使徒言行録』ではテモテたちはヴェリアにとどまっていた，アテネにはパウロー一人が行っているような筆致になっている。これも矛盾点の一つとなっている。

⑨、ギリシア語原語では『第二コリント書，三の14』に由来する「パライア・ディアテケー」，つまり「古い契約」ということになる。

⑩、エリュシオンについてはホメロスの『オデュッセイア，四の561』以下にでてくるのが当然文献としては最初になる。「幸福者の島」という言い方はヘシオドスの『仕事と日々，171』以下が最初となる。いずれにせよ最古の文献に共に現れていることになる。

『オデュッセイア』では死霊の神託所の描きで紹介したように基本的に英雄たちは「死者の冥界」にしていることになっているのに，それが四巻では「メネラオス」の運命について彼は神ゼウスの娘ヘレネの夫になっているので死後は憂いのない「エリュシオン」に送られることになっているといわれている。これが後代，たとえばプラトンなどを見ると当たり前のように最大の英雄アキレウスなどがいるところとされている（『シュムポシオン，179E』）。

他方ヘシオドスの「幸福者の島」は，はじめから五世代説話において第四世代の「英雄たち」に用意された「はるか大地の果てにしつらえられた憂いのない土地」であるが，これがプラトンによると「人間たちの中でその生涯を正しく敬虔に生きた者」「神を敬い，真理を友として生きた者」が移される島とされている（『ゴルギアス，523A～527A』『国家，540B』など）。

